結婚前夜、片想いの相手から駆け落ちを提案される話

浜野ほたて

1

秋月晴（あきづきはる）は憂鬱だった。

今日は六年間勤めた印刷会社の退職日。理由は婚約者との結婚、つまりは寿退社だ。

彼女の頭には犬の耳が、腰の下あたりからはくるんと丸まった尻尾。晴は犬耳族（いぬみみぞく）という種族だ。人間でありながら犬の形質を受け継ぐ不思議な種族は、現代日本において人と共生している。

他にも猫耳族（ねこみみぞく）、狐耳族（きつねみみぞく）などもいる。晴の直属の上司である課長は狸耳族（たぬきみみぞく）だ。

そういった種族たちは愛らしい、かっこいいともてはやされる一方、純粋な人間よりも嗅覚や聴覚が数倍優れているせいで日常生活に困難が発生する場合もある。晴の場合は嗅覚が非常に発達しているた

め、抑制剤を飲んで生活している。それでもインクのにおいはきつい。パソコンも使えるからと営業部で事務として仕事をしている現状だ。

生まれた時から晴に自由というものは与えられなかった。

晴の家は犬耳族の中でも日本の固有種「秋田犬（あきたいぬ）」の種族として登録されている。身長は男性なら一八〇、女性でも一七〇センチを超え、豊満な肉体が特徴だ。きりっとした短毛の耳に尻尾、それが近年注目されているようで、晴の姉や兄は俳優やモデルといった華やかな場所で活躍をしている。それなのに晴は身長が一六〇センチもない。人間にすると平均より少し大きいが、秋田犬の犬耳族としては異常な小さ。さらにはむく毛と呼ばれる長毛として産まれてきた彼女は、秋田犬の血統登録が受けられない規格外の存在だった。

両親や兄弟からは毎日身長や体毛の事を詰られ続けた。大学に行くという選択肢は与えられず、せめてもの抵抗で小さなアパートで一人暮らしをすることが許された。

貧乏神がいると家が廃れる、という理由で追い出される形にはなったものの、きっちりと給料は家に入れるよう命令された。逆らい、そのたびに酷く叱られたり手を上げられ、何をしても無駄だと悟ってからは波風が立たないように生活をしてきた。

「どうして…」

終業後、夕暮れのオフィスでひとり呟く。

定時退社が基本の印刷会社の営業所で好き好んで居残りをする人はいない。退職日だからと渡された花や色紙を眺め、終わらない荷物の整理をのろのろと進める。

婚約者ができたから帰ってこい。
　そういわれたのは先月の話。聞けば地元の大地主が未婚の晴を気に入ったらしい。
　体裁を気にする秋月家にとってはまさに渡りに船の提案だったようで、晴の意志はまったく聞かれずに決まってしまった。規格外をもらってくれる人間、しかも金も権力もあるのなら熨斗をつけて喜んで送り出す。そういう人たちだ。
　確か年齢は五〇代、若い女性を何人も囲っているという。小柄で肉付きがいいから気に入ったようだと両親は喜んでいたが、体目当てなのだろう。評判を聞くに、いい生活は見込めそうにない。
（藤崎（ふじさき）さんみたいな人だったらな…。）

書類を仕分けながら、一人の同僚の顔を思い浮かべる。
藤崎アレン。二年ほど前に転職してこの会社にやってきた営業マン。晴の片想い相手。日本人の父とフランス人の母を持つハーフで、大学までフランスで過ごしていた帰国子女。3か国語を使いこなすエリートだ。
一八五センチ以上のスーツの似合う体型とよく整った顔立ち。男性にも女性も好かれる人柄と手腕。あっという間に会社の業績を伸ばしていったすごい人、というのが晴の認識だ。そんな彼もなんの因果か、彼も確か今日でここから東京の本社に異動するのだそうだ。
(それはそうだよね、藤崎さんは優秀だもん)
営業事務である晴も何度か仕事をしたことはあるけれど、細やかな気遣いや相手が何を求めているのかを汲み取って提案する力を持つ人だ、という印象だ。とても優しく、それこそ俳優ですと言っても全く

疑われないような顔立ち。そんな男性に優しく何かを言われて、落ちない女性なんているだろうか、とさえ思ってしまう。当然のように女子社員から猛アタックされる程には魅力的で、なのに全く浮いた噂がない。

少なくとも、顔合わせの際に全身を舐め回すように眺めてきた自分の婚約者とはまるで違う。

親が決めたとはいえ結婚相手だ。なんとか好きになろうと努力をしたものの、会うたびに全身を値踏みするように見つめてから近くに座らせて、さり気なく胸を触ったりしてくる脂ぎった男をどうしても好きになれなかった。敏感な鼻が恨めしいくらいに体臭を嗅ぎ取ってしまい、毎回吐き気を抑えるので必死なのに、これからその生活が相手

が死ぬまで永遠に続くのだ。
「いっそ、逃げちゃおうかな…」
親に抵抗する勇気なんてないのに、妄想が口をついて出る。
最近好きで読んでいる小説なら、魅力的な家来や王子様がさっと助けてくれるものだ。それで新天地で一旗揚げて、幸せになる。
のろのろと意味もなく荷物を出したり直したりすることを繰り返し、ようやく八割ほど整理が終わった。今になってはもう少し使うかもしれないと不要なものばかり残していた自分に後悔しかないが、フロアの鍵は預かっている。営業所と併設されている工場は24時間運転だから、整理が終わればそこの守衛に鍵を渡せばいい。
「…藤崎さん、荷物まとめてるのかな」
異動とはいえここを去るからには荷物をまとめないといけないはずだ。立ち上がって机の方向を見ると、ダンボールと横に大量のバイン

ダーが積み上がっているのが見える。
ふと、耳が足音を感じ取った。扉の開く音と一緒に流れ込んでくる汗の匂い。
くん、と匂いを嗅ぎ取ると、唐突にお腹の奥がぎゅうっと握られたような感覚が襲う。どぷりと子宮から愛液が溢れて流れる感触。
（な、なんで…発情期はもうちょっと先のはず…）
犬耳族の男か、発情期の犬耳族の女性のフェロモンによって感じるこ9とはある。しかし、この営業所は犬耳族は晴一人だけのはずだ。
不審者。その言葉が浮かび、恐怖で体が固まる。
その思惑とは裏腹に、扉から見えたのは見慣れた紺色のスーツだった。焦げ茶の髪にグレーのネクタイ。晴が一番好きな人。
「ふ、藤崎さん…」
「秋月さん、まだいたんだ。よかった〜、誰もいなかったら守衛さん

まで鍵取りに行かなきゃって思ってたから」
暑い暑いとつぶやきながらクリアファイルで顔を仰ぐ彼を見て、安堵感に包まれる。
(びっくりした…。発情しちゃったかと思ったけど、好きな人の汗の匂いだからかな)
確か犬耳族の女性が「好きな人の匂いで興奮することがある」とテレビで話していた気がする。それが本当なら、藤崎の汗の匂いでドキドキしてもなんの違和感もない。
だって彼は普通の人なのだから。
「ねえ、秋月さん。荷物の整理終わった?」
「あっ…あと少しだけあります」
席から話しかけられ、思わず声が上ずってしまう。
「そっか。すぐ帰っちゃう?少し話したいんだけど」

「へっ？あ、えっ、はい。わかりました」
急激に心臓がうるさいくらい鼓動を早くする。事務的な話だろうが、プライベートだろうが、最後の日に大好きな人とふたりきりで話せるチャンスを貰えたのは人生一の幸せだと言っても過言ではない。
尻尾がせわしなく動くが、座っているから見えないはずだ。
「もしかして焦らせちゃったかな。涼んでるからゆっくりでいいよ、怪我しないようにね」
「ありがとうございます」
扇風機の電子音と、ペットボトルを開ける音。藤崎の方はすでに整理は終わっているようで、背中越しに彼の方を覗き見ると、晴と同じようにもらったらしい色紙を眺めていた。足を組んで椅子により掛かる姿があまりにも様になっていて、つい凝視してしまう。
なんの変哲もない田舎の会社の一室も、彼が座ればおしゃれな雑誌

の写真として使えそうなくらいの雰囲気が出る。
　きれいな横顔だ。一族の人間にも顔のいい人はそれなりにいるが、そんな人達よりもずっときれいに感じるのだ。
　一瞬婚約者の顔が浮かぶが、頭を振って卓上カレンダーに手をかける。
(浮気じゃない、だって藤崎さんは同じ会社の同僚ってだけだし。…それに明日から好きになるようにちゃんと努力するから)
無心で整理を終え、荷物をダンボールに詰めると、あっという間に二〇分も経過していた。
(過去の私…荷物をため過ぎだよ)
やりきった開放感と何を話されるのかわからない緊張で胸を高鳴らせながら、藤崎のデスクへ向かう。
「終わった？お疲れ様」

朝から急ぎの打ち合わせが入り、そのままずっと外回りをしていたというのに、彼はいつもどおり柔らかい雰囲気で話しかけてくる。そんな感じだからモテるんだなぁと、晴は素直に感心した。

いつだって彼は余裕を崩さない。

はしゃぐときははしゃぐし、なにかに驚いたときは声を上げたりするものの、絶対に心から取り乱したりすることがないのだ。

それがオトナの余裕だよね！と女子社員たちは噂していたが、そのとおりだと晴も同意していた。

彼は組んでいた足をおろし、立ち上がって手招きをしてくる。晴の方を見て、かがんでから微笑みかけてくる。

「別に怒ったりないから、心配しないで」

「あっ…すみません」
気がつくとせわしなく振ってしまっていた尻尾を掴んで頭を下げる。怖がっていると誤解させてしまったようだった。
「秋月さんにはちゃんとお礼を言わないと思ってさ。ほら、こっちに来たての頃、地図とか新規開拓できそうな会社とかまとめてくれたでしょ？すごく助かった」
「そ、そんな…。ずっとここに住んでて土地勘があっただけですから」
そんなことあったっけ、と晴は必死におぼろげな記憶を探る。
　確かに藤崎が転職してきた頃、彼は営業会議でも新規の取引先を開拓すればもっと業績が伸びると言っていた。社員はそれなりに繁盛している状況に満足していた。社長を含め、特段野心がある人もいなかったせいで積極的な新規開拓なんて考えたこともなかったらしく、当初はあまり協力的でなかった気がする。

（夜遅くまで仕事してたから、そういうのを渡した気がするけど…）
晴にとって、というよりも営業所の人間にとっては地元のコミュニティや会社情報なんて当たり前の情報だから誰も渡してなかったのだろうか。藤崎にとっては完全アウェーからのスタートだから、もしかしたら助かったのかもしれない、と勝手に想像する。
「確か寿退社だったよね…相手、どんな人？」
「え…？」
ぴくりと耳が動く。顔を上げるとなんとか言葉を選んで話してくれているらしい彼の顔が複雑そうに歪んでいる。
困ったように笑っているのか、怒っているのか、悲しいのか…。
晴は理解ができなかったものの、心配してくれているということだけは汲み取ることができた。

「秋月さんが幸せになれるならいいんだけど、最近ほら、ちょっと暗かったし…。悩んでるのかなって」
それにね、と藤崎が言葉を続ける。
「一回聞いちゃったんだ。地主の人と結婚させられるって話してるところ。結構年が離れてるって聞いたからさ」
「それは……」
頭の中がさっと冷たくなっていくのを感じた。確かに何度か職場の同僚に話したことはある。でも女性だけ、それも休憩室で声をかけてくれた時に少し話しただけだ。
一番聞かれたくない相手が居合わせていた。好きな人には事情を知られず、笑って送り出してほしかった。
何の心配もせずに忘れて、幸せになってほしかったのに。

「俺でよければ…話、聞くよ？秋月さん、今日で最後だし」
いつもの優しい口調に促されるまま、最後だからという甘い言葉に乗せられて、つい話してしまった。
婚約者の事、親の事、お金の事…。
口をつくとすらすらと出てしまう。誰かに話したかったけど、どうにもならないことだから話せなかったことを。
藤崎は晴の話をさえぎるわけでもなく、静かに耳を傾けた後、すこし考えるような仕草を取る。
「そっか。それにしても五〇代って…親御さんと同じくらいじゃない？」
「そ、そうです。でも、いいんです。私、秋田犬なのにこんなに小さいですし、むく毛だから血統登録もされていないし。こんな地元じゃ誰も貰ってくれないでしょうから」

秋田犬の一族なら自身が希少種だということを登録することができる。しかし晴は体格にも恵まれず、さらにむく毛ということで秋田犬の正当な血統登録ができないのだ。

姉や兄はいいところの子供なのに、自分だけいいところの出来損ない。

そのせいで誰からも相手にされなかったし、今度の縁談だって妻と言いながらも秋月家の血統と晴の体目当てなのは火を見るよりも明らかだ。

「都会に出たりとか、考えないの？」

「高校卒業の時に考えたんですけど、両親が全然許してくれなくて。信じられないかもしれないんですけど、お給料も結構渡しているから貯金もできてなくて…」

本当におかしな話だ。

けれど抗えば抗うだけ消耗する。何も得ることはできないし、うんうんと頷いておけば、少なくとも波風が立つことなく平和に暮らしていける。

二〇余年生きてきて得た教訓だ。

不意に現実に戻され、難しい表情をしている藤崎に慌てて頭を下げる。

「すみません、藤崎さんもお忙しいのに」

「気にしないで。寧ろ話してくれてありがとう」

柔らかい笑みを向けてくれた後に表情を曇らせる彼は、少なからず晴のこの先を心配してくれたのだろうということは容易に想像がつく。

この会社から出たらおそらくかかわるこのない他人だ。構わなくても全く困らないはずなのに、なにかできることはないか思案してくれている横顔を見て、胸が締め付けられる。

彼と一生を共にできる人は、きっと一生幸せだ。

「……藤崎さんみたいな人だったら良かったのに」

ほんの少しの嫉妬心から、そんな言葉がつぶやきとして口からこぼれる。

「ん？何か言った？ごめんね、聞こえなくて」

「い、いえ！何も話してないです」

身長差が３０センチ以上あるせいか、聞き取れなかった藤崎がかがもうとするのを慌てて止める。

聞かれてしまったら恥ずかしすぎて死んでしまう。今だけはこの距離感がありがたかった。何か話をそらす方法はないかと頭の中の知恵をかき集め、なんとか話題をひねり出す。

「あの…用事ってこれだけでしょうか？」

今度は聞こえるように。
　すると藤崎は「そうだった」と言いながら机の下の大きな紙袋をり始めた。
「秋月さんに渡したいものがあってね」
「え…渡したいもの…？」
はい、と渡された小さな紙袋からはほのかにいい香りがする。おしゃれな紙質の紙袋を受け取ると少しだけ重みがある。
「退職祝いとお礼を兼ねて、気に入ってくれたらいいんだけど」
中身を見ていると、手のひらに収まるくらい小さな箱と、片手で持てそうなくらいの箱が入っている。片手で持てそうなくらいの箱の上側には英語かフランス語が書いてあり、フレグランス、だけ読み取ることが出来た。
「そ、そんな…受け取れません」

こんなにいい香りのものを相手の家に持っていけば、すぐに取り上げられてしまうことは目に見えている。きっといい品物だ、それに行為で渡されたものが蔑ろに扱われる光景なんて見たくない。

「いいから。姉が経営している会社の香水なんだ。犬耳族の人にも喜ばれているみたいだから」

藤崎は表情を変えずに両手で晴の手を包み、返そうとした手を下げさせる。

暖かく大きな手が、骨ばった好きな手が晴の小さな手に重なる。

手が触れた瞬間、ドクンと心臓が跳ね上がる。

（あれ…？）

汗と香水のにおいが鼻をひくりと刺激する。

瞬間、全身の毛穴からぶわりと汗がにじみ、子宮がせわしなく震え、屈強な雄の気配に喜ぶようにきゅんきゅんと疼き始める。今までの発情期がお遊びに感じてしまうくらいの、濃厚な快楽。

ショーツの中があっという間に愛液で溢れるのを感じ取る。

「ふえ…あっ、あぅ…」

最後の理性で紙袋を横のデスクに置き、手をつく。

「ひぃっ、あ…な、なんでっ…♡」

尻尾を振って快楽を逃がそうとすると付け根から背筋へ急速に伝わり、ぶるりと体が震える。ブラジャーに収めている胸はパンパンに張り、先の突起が痛いくらいの主張を始める。顔が熱く、背中からも汗が伝う。

誰が見ても言い逃れができない、発情の兆候。

「秋月さん、大丈夫？」

腰ががくがくと震え、立っていられなくなる。ずるりと崩れ落ちると同時に、藤崎の腕が晴のわきの下に滑り込んだ。支えてくれたおかげで尻もちをつくことはなかったけれど、胸元に顔をうずめる形となって、より匂いを吸い込む形になってしまった。

彼に申し訳ないという気持ちよりも、あっという間に快楽が勝ってしまい、腰がびくびくと跳ね上がる。足の間は下着が意味をなさないほどに大洪水を起こしていて、頭の中が真っ白に染まっていく。

すんすんと動く鼻と浮気になってしまうと焦る思考。すべてがぐちゃぐちゃで、自分の体なのに全く力が入らない。

(藤崎さんのにおい、汗のにおいが鼻に…ダメ、お嫁さんになるのに、ほかの人のにおいで発情しちゃってる)

「ご、ごめんなしゃ…あっ、あう♡」

「うぅん、大丈夫だよ」

低い笑みと熱い吐息が落ちてきた後、唐突に藤崎の腕に込める力が強くなる。距離が近づき、濃厚な匂いと体温が晴を包む。
「んぁ♡だめ、ふじさきさっ♡♡」
「秋月さん、発情しちゃったんでしょ？お腹がすっごく熱いもんね」
藤崎の太もものあたりに晴のお腹辺り、熱が伝わる。体位を変えられて後ろから抱きすくめられる形になって、より匂いが濃くなる。
「それにすごくエッチな匂いもする。すごくおいしそう…」
うなじに藤崎の鼻が触れる。かすかな吐息でも背筋が震え、あられのない声が漏れてしまいそうになる。
今日で辞めるとはいえ、職場で淫らな行為をしてしまうという事への抵抗感が焼ききれそうな理性を瀬戸際で踏みとどまらせていた。
「ごめんなさっ、違うんです、普段はこんなふうにならなくてっ」
「いいんだよ。犬耳族の男の汗には女を発情させる作用もあるからね」

思いがけない単語にぐずぐずになった脳は理解が追いついてこない。はっはっはっ♡と肩で息をしながら突然の告白を耳で感じる。
「い、いぬみみぞく…でも」
「俺は犬耳族なのに耳も尻尾もない欠陥品だ。その代わりフェロモンがすごく強くてね、今までフェロモンを抑える薬を飲んでたんだけど、今日はもういいかなと思って」
臍のすぐ下、子宮があるあたりを大きな手で優しくなぞられる。
ずくずくという痛みを伴う疼きと快感が何度も襲い、撫でられるたびに腰が浮く。いけないことなのに、スカートの中で閉じた足がかくんと開く。
我慢していた愛液がどぽり♡と漏れて太ももを濡らす。
「んぉ♡♡だめっ♡しきゅうなでなで♡だめ♡♡うわきっ、うわきになっちゃう♡」

「でも振りほどけないくらい気持ちよくなってくれてるんだね、嬉しいよ♡」
なんとか腕を振りほどこうとするのに、信じられないくらい発情しきった体は全く力が入らない。
乱れた様子を堪能した藤崎の顔が耳から離れ、仰け反って快感を逃がそうとする晴の表情を見下ろしてくる。
不思議な色の目が誘惑するように晴を捕らえ、吐息の混じった声で優しく耳にささやきを落とす。
「ねえ、秋月さん。二人で逃げちゃおうよ」
「ひゃんっ♡に、にげる…？」
吐息一つで震える体に、藤崎は甘い誘惑を与え続ける。
「そうだよ。君の婚約者となんて絶対に結婚させない。実はね、ここをやめるのは栄転なんだ。父は本社の社長なんだけど、東京に戻って

きて会社の役員をしろってさ。ね、秋月さんも東京に来てよ。それでさ、俺のお嫁さんになって」
「そ、そんなのできないっ…追いかけられる」
逃げ出したい気持ちは勿論ある。けれど何度やってもできなかったことが思い起こされ、そして婚約者がいるという考えが晴の首を横に振らせる。
それなのに、そんなことはお見通しだと言わんばかりに、すぐさま取って返される。
「大丈夫だよ、そんなことにはならないから。苗字を変えてたからわからないだろうけど、俺は大神家の人間なんだ」
「お、おおがみけ…」

犬耳族の総本家、大神家。

すべての犬耳族の祖先であるとされ、彼らが普通の人間と遜色ない生活が送れるように尽力してきた一族。その恩と各業界へ顔が利くことから、犬耳族で逆らおうという者はまず出てこない。
「ね、犬族なら絶対に逆らってこないから大丈夫だよ」
わかっているよね。と、子宮の上を指でとんとんとリズミカルに刺激され、晴の体は敏感に反応する。
「おっ♡♡♡だめ♡指だめなのっ♡♡」
「秋月さん、さっき言ってくれたでしょ？俺が旦那さんだったらよかったって」
ただ服の上から子宮の上を指で叩かれたり指先で押されたりされるだけで快感に溺れる体は、甘い声に従いたいと悲鳴を上げる。
だらだらと愛液を垂れ流している入口への刺激を求めるようにへこへこと腰が動く。しかしそこへの接触は一切なく、子宮へを押すだけ。

「愛してる、ほかの雄に取られるなんて思ったらおかしくなりそう。お願い、一緒に来て。一生かけて愛してあげるから」
「あっ♡んぃ♡♡らめ♡やめてぇ♡♡」
耳の近くで発せられる言葉に、口だけの抵抗を重ねる。
　本当はやめてほしくなんかない。職場なんて関係ない、今すぐ刺激が欲しい。触って、と欲しがる体は発情した雌犬の香りで誘う。
「子供は寂しくないように二人作ろうね。でも、産まれる前まではいっぱいデートもしたいな」
ぐりぐりぐりぐり♡
今までで一番強い押し込みに、晴の心も快感に飲まれたいと傾き始める。一度発情してしまったら鎮まるまでそのまま。
過去のケースであれば、一人で慰めるか我慢をすればなんとかなってきた。

けれど今回はあまりにも強すぎるフェロモンを処理しきれず、脳まで蕩けきってしまいそうなほどぐずぐずになる。
「あ〜〜〜♡♡♡ぐりぐりだめっ♡押さないで♡♡お腹♡きゅんきゅんしちゃうっ♡腰振りとまんにゃいっ♡きもひっ♡♡こわいっ、こわいの♡イクのこわいぃ♡♡あぁっ♡とめてぇ♡♡」
「毎日満足するまでいっぱい愛し合って、俺なしじゃ生きていけなくなる体にしてあげるからね♡今みたいに匂いを嗅いだだけで発情して、エッチなおねだりしたくなるようにいっぱい躾けてあげるから♡」
抱きこまれ、濃厚なフェロモンをたっぷりと体に教え込まれ、支配される気持ちよさを強制的に叩きこむ鬼畜具合に体はすでに白旗を上げる。
「俺のものになって、なるって言って」

「だめっ♡♡♡わたひ♡およめさんになるのにっ♡♡♡おっ♡子宮なでなでやめてっ♡♡♡藤崎さんのものに♡なりたくなるのっ♡♡♡イグッ♡イッちゃう♡♡子宮なでなでイグうぅ♡♡♡」
何とか快感を逃がそうと腕の中でもだえる晴を見て、藤崎はまるで崖から突き落とすかのようにささやく。

「晴、愛してるよ」

その瞬間、晴の中で理性がはじけた。
頭が真っ白になり、快感で染め上げられる。
「あぁあああ♡♡♡あっ♡あはっ♡あん…♡きもひっ♡♡あぁ…♡」
ここが会社のオフィスだと忘れてしまうくらいの声を上げ、びくびくと体が仰け反る。

脳がショートし、快感が下がっていくとともに意識が遠くなる。
「気持ちよくなりすぎて気を失っちゃった？こんなに蕩けた顔になって。あぁ…本当に可愛いよ♡俺のとってるホテルに行こうね♡たっぷり愛して、お嫁さんになりたくなるくらいにドロドロにしてあげる」
「はぅ…あっ…♡」
完全に意識を手放す前の恐ろしい宣言にも、快感の余韻でもだえる体は反応ができなかった。